

相互評価とフィードバックを用いた学生向けプレゼンテーション 学習方式

荒川奨^{†1} 湯浦克彦^{†1}

概要： ビジネスコンテストに出場するような活動的な大学生など中上級者向けのプレゼンテーション学習方式を開発し、10名ほどの学生に適用した結果を報告する。本方式では、各自が自由題材のプレゼンテーション制作を行いながら、他の受講生による総合的なパフォーマンス評価や、講師による学習項目別の進捗度評価に基づくフィードバックを行う。フィードバックはモチベーションの向上、相互評価は他者からのコメントによる客観的事実の認識に効果があった可能性が示された。

A Presentation Learning Method for Students Using Mutual Evaluation and Feedback

Sho Arakawa^{†1} Katsuhiko Yuura^{†1}

Abstract: A presentation learning method for medium and advanced students, such as active college students who will participate in business contests is developed, and report on the results of applying to about 10 students. In this method, while conducting a presentation of free material, each student performs comprehensive performance evaluation by other students and feedback based on progress evaluation by lecturer by learning item. It was shown that Feedback was effective in improving motivation and Mutual Evaluation was effective facts by comments from others.

1. はじめに

情報化が進んでいる現在の社会の中で、自分の考え方や意見などの情報を相手に伝達するツールとしてプレゼンテーションを実施する機会が増え、より効果的に伝達する能力を備える必要性が高まってきている。特に、従来では営業やマーケティング部門において、製品やサービスの説明をする役割としてプレゼンテーションを行なっていたが、近年では開発者達が開発から製品の説明までのすべてを行うことが求められる傾向がある。また、企業の間だけではなく大学での教育過程における課題の発表や就職活動における自己アピールなどの際にプレゼンテーションを実施することも増えている。そして、学生時代に培ったプレゼンテーション能力が社会や企業の中で重要な能力要素の一つとなっている。

しかし、プレゼンテーションを専門的に学習する機会が少ないのが現状である。特に、専門書などによるプレゼンテーション学習と、実際に人前でプレゼンテーションを行う実践の両方を同時に体験する機会は少ない。

先行研究である金ヨソ プレゼンテーション製法に関する学生向け学習方式(参考文献[1])では、プレゼンテーション学習ホームページを作成し静岡大学情報学部の学生に対して適用しその効果を検証した。結果として、発表資料の視覚的追加が成果として確認されたが、初級者の

学習モチベーションの向上を高めるまでに至っていないことが課題として残された。

本研究では、ビジネスコンテストなどに出場経験のあるような中上級者向けである学生に対して、学習と実践を同時に行うワークショップを開催することによる効果を評価する。

2. プレゼンテーションのスキルと学習の課題

2.1 プレゼンテーションとは

アントニー・ジェイは、著書「Effective Presentation」(参考文献 [2])において、プレゼンテーションとは、情報伝達の手段の一種で、聴衆に対して情報を提示し、理解・納得を得る行為を指すと述べている。また、菅野誠二は、著書「外資系コンサルのプレゼンテーション術」(参考文献 [3])において、プレゼンテーションとは、発表・提示という意味だけではなく、聞き手への「アイディアのプレゼント」である。その目的として、対象相手に新たな認識を与えたり、判断や行動を促したりすることであると定義している。つまり、プレゼンテーションとは、発表者が聴衆に情報を提示したことに対し、聴衆が興味・理解を示し意思決定を行うための双方向的なコミュニケーションであるといえる。

2.2 プレゼンテーションの重要性

プレゼンテーションはコミュニケーションを効果的に行う手法として用いられている。コミュニケーションスキル

^{†1} 静岡大学 情報学部
Faculty of Informatics, Shizuoka University

が社会の中でどれほど重要視されているのかが、一般社団法人日本経済団体連合会「新卒採用に関するアンケート調査結果」(参考文献[4])によって示されている。これによると、コミュニケーション能力は、2001年には約50%程度の企業しか重要視していなかったが、それ以降上昇し続け2017年には80%以上の企業が重要視するようになっている。

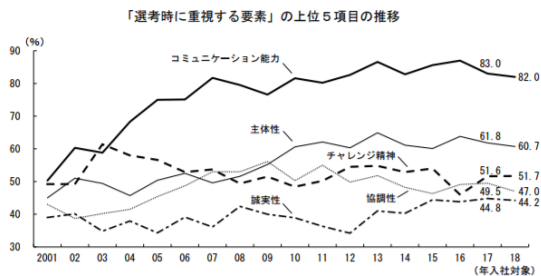


図1 一般社団法人日本経済団体連合会「新卒採用に関するアンケート調査結果」PDFより引用(参考文献[3])

2.3 プレゼンテーションの構成方法

バーバラ・ミントは著書「考える技術・書く技術」(参考文献[5])において、「わかりやすい文書は、主題に関するさまざまなメッセージ同士の関係を正確にわかりやすく表現することから生まれ、正しく構成すれば、これらのメッセージは常にひとつの考えを頂点とし、いくつかの要約層で成り立つピラミッドを形作ります。」と述べ、その手段として演繹法と帰納法について紹介している。

2.3.1 プレゼンテーション的理由づけ

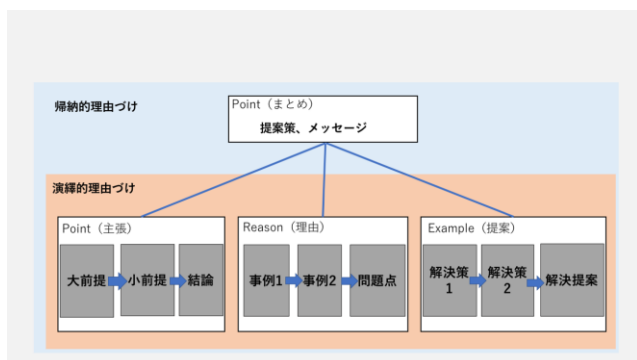


図2 本研究によるPREP法に基づくプレゼンテーション的理由づけの仕組み

帰納法と演繹法を組み合わせた論理構成方法の一つとして、本研究ではPREP法を導入して、メッセージ・ストーリーラインの明確化のモデルとした。

中村かすみ・中嶋秀隆・マツシルバーマンらは著者「できる・使えるプレゼン術」(参考文献[6])において、要領よく物事の説明をする際にはPREP法が効果的であると述べている。PREP法とは、Point(結論、一番言いたい部分)、Reason(理由、具体的な説明)、Example(事例や具体例、提案)、Point(結論、一番言いたい部分)の順に論理展開する文章構成方法のことである。

プレゼンテーション的理由づけの仕組みの1つとして、ストーリー全体を帰納法理由づけで構成し、それぞれの要素の内部を演繹的理由づけで構成したモデルを、本研究の学習方針として採用した(図2)。

2.4 プレゼンテーションの学習方法

2.4.1 プレゼンテーションスキルの学習方針

ジーン・ゼラズニー(参考文献[7])は下記のように述べている、

事前の準備を入念に行うようになり、必要なスキルが身につく、さらにそれなりの経験を積んだので、思わぬ事態に陥っても、あわてることが少なくなった。上達の道はこのプロセスにある。

また、中村かすみ・中嶋秀隆・マツシルバーマンら(参考文献[6])は下記のように述べている、

プレゼンテーション＝コミュニケーション能力は一朝一夕で養えるものではありません。あらゆる状況に対処できるようなプレゼン能力は、数多くの実践を通して身につけていくものです。

Kevin Carroll・Bob Elliott氏ら(参考文献[8])は下記のように述べている、

スキルを上達させるためには、自分で練習の機会を作り経験を積むことである。

スキルアップをするためには、基礎的な知識やスキルを身につけ、その上で経験を積み重ねることで得られるものであるのではないか。

2.4.2 従来のプレゼンテーションの学習方法その比較

プレゼンテーションスキルを向上させる方法について、下記5つの方法(参考文献[1])を取り上げて、その特徴と期待効果及びデメリットを述べる。

- (1) ネットでプレゼンテーションスキルに関する情報収集
ネット上でプレゼンテーションスキル及びそれに付随する情報を収集し、学習する。利点としては、ネット環境が整っていれば世界中のプレゼンテーションに関する情報から学習することができる。しかし、個人的な意見を含んだコンテンツが多く、断片的な情報であることから、学習機能を果たすものは少ない。また、個人学習となるので学習モチベーションを上げることが難しい。
- (2) プレゼンテーションに関する書籍を読む

専門的で正確な知識を基礎的なレベルから上級者向けのレベルの知識まで得ることができる。しかし、知識の取得に時間がかかり、書籍の内容の傾向や質によって得られる知識も影響される。

(3)プレゼンテーションスキルを高める講義を聴く

教育機関で行われるプレゼンテーションの講義に参加することで基本的な内容から高いレベルの内容まで体系的に学習をすることができる。学生の場合は、学校で関連授業を受けることもできる。しかし、プレゼンテーションスキルだけを教える講義や教育機関は少なく、あっても有料であることが多い。

(4)他人から評価をしてもらう

他人にコメントをしてもらうことで、新しいアイデアを得たり、自分のプレゼンテーションレベルを自覚したりしながらプレゼンテーションスキルを向上することができる。特にプレゼンテーションの経験豊かな人からのコメントや感想を聞けるのでスキル向上に良い影響を与えることができる。しかし、相手とコミュニケーションをとるための時間や場所的な制約がある。

(5)他人のプレゼンテーションを評価する

プレゼンテーションを発表する場において他人のプレゼンテーションを評価することで自分のプレゼンテーションと相対評価することで分析・学習ができ、他のプレゼンテーションへの評価方法を習得することができる。また、その場で改善点やアドバイスを受けることができるのでスキル向上を期待できる。しかし、人数制限や場所などの制約がある。

2.4.3 レベル別による学習方法

初級者向けのプレゼンテーション学習であれば、2.4.2の(1)ネット検索と(2)書籍を読むことによって基礎的なスキルを身につけることが可能である。しかし、中上級者の学習方法としてはさらに高度なスキルや経験が求められるので、(3)専門講義の受講に加えて(4)他人からの評価及び(5)相互評価の導入することが望ましいと思われる。

2.5 静岡大学情報学部における課題とそれまでの取り組み

2.5.1 初級者向け学習方式の開発と実施

3段階に学習段階を分けられたテキストを用いて、同じ静岡大学の初級者向けの適用実験(参考文献[1])を行なった。限定された学習効果が見られたが、講師の指定したページ以外への参照が少ないなどモチベーションの向上には繋がらなかった。

3. プレゼンテーションワークショップの企画・準備

3.1 ワークショップの対象者と目的

ワークショップの対象者の条件として、静岡大学情報学部在学中の学生であること、大学の授業での発表やコンテストなどにおけるプレゼンテーションの経験がある程度あること、プレゼンテーションスキル向上に意欲があることをあげてワークショップを実施した。

2017年10月から11月にかけて開催された2017年度第7回静岡大学ビジネスコンテストに静岡大学情報学部3年生約200名の学生のうち25名が参加している。ビジネスコンテストの参加者は学生の中でも最もプレゼンテーションに関心が高い学生たちである。すなわち、本研究の学習方式のターゲットは情報専門学部のうち約1割に当たる人数が存在する上級者層であると考えられる。

本ワークショップの目的は、専門的な知識の定着やプレゼンテーションやスライドなどの制作能力の向上、ワークショップ開催前と開催後との間でどのくらい達成されたかを検証することにある。

3.2 ワークショップの講師の条件

本ワークショップの講師としての条件は2つある。1つ目は、ワークショップで使用するテキストの内容を網羅的に理解し他人に教えることができること。2つ目は、プレゼンテーションを過去に幾度か経験していることである。本ワークショップでは報告者が講師をつとめた。報告者は、テキストの理解をし、過去に大学の授業やビジネスコンテストへの出場し幾度かプレゼンテーションの経験をしている。

3.3 学習方式

3.3.1 フィードバックによるモチベーションの向上

フィードバックの有無による学習モチベーションの差異を図3に示した。学習ホームページによる学習コンテンツの提供だけでは学生の学習モチベーションが上がらないという課題を残していた。(参考文献[1])本研究の学習方式では講師や他の受講生からの反応(フィードバック)を受けることによって、自身のプレゼンテーションの改善すべき点や改善方法に気づく。そこで、モチベーションを維持しながら学習することができるのではないかと考えた。

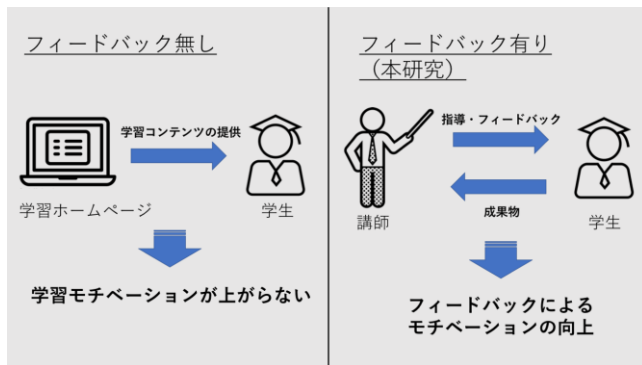


図3 フィードバックによるモチベーションの向上

スライドとワークシートは、金ヨソによる学習ホームページ（参考文献[1]）を元に作成している。この元の学習テキストは知識学習の内容とそれに基づく成果物の作成の指示が混在していた。そこでこれを今回は、知識学習用のスライドと成果物の作成用のワークシートに分けて行う。

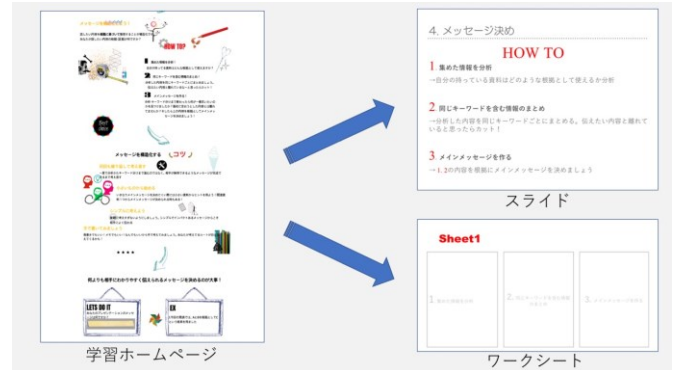


図5 学習ホームページ内容のワークショップスライド及びワークシートへの適用

3.3.2 学習手順

本ワークショップの各回の内容とフィードバックのタイミングを図4に示す。第1回から2回にかけて発表資料の作成までを行い、第3回でリハーサル、第4回で最終発表を行うという学習手順となっている。また、第1回から3回までのワークショップで作成される中間成果物を元に1回目のフィードバックを行い、第4回で発表した際の相互評価の結果と最終成果物を元に第2回フィードバックを行う。

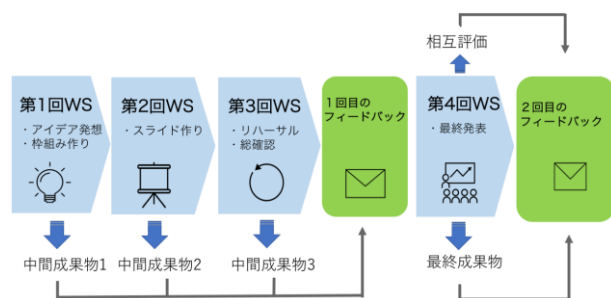


図4 ワークショップの流れ

3.4 スライドとワークシートの作成

本研究の学習方式においては、学習テキストとしてスライドとワークシートを用いる。

スライドには、プレゼンテーションの知識学習とともに3.4.2に述べる相互評価やフィードバックのタイミングなどの指示も挿入している。

ワークシートによって、成果物の作成と3.5で述べる学習進捗評価指標で参加者の進捗度評価ができる形となっている。

3.5 学習進捗評価指標と相互評価シート

3.5.1 学習進捗評価指標とその測定方法

ワークショップ参加者に対してフィードバックを行うための基礎データを得るため、学習進捗評価指標（図6）を作成した。評価指標としては、まず金ヨソの学習テキストの10項目を評価項目として導入し、これに本研究評価において評価項目ごとに5段階に分けて判定する指標基準を設定した。そして、ストーリーラインの項目では2.3.1で述べたメッセージの構造を意識するように指導する。5段階評価の例としてストーリーラインの内容を下記に示す。

- 5.聴衆の特徴に合ったストーリーラインが作成できる
- 4.簡潔なストーリーラインが作成できる
- 3.PREP法を利用したストーリーラインが作成できる
- 2.ストーリーラインができている
- 1.PREP法の内容を理解している

測定方法は、3.4で述べたワークシートによる中間成果物と最終発表までに作成されたパワーポイント資料を講師が見て評価する。

成果物の資料制作、メッセージ、効果的資料及びリハーサルについては、外観から判定しやすいので、受講生による相互評価も行なっている。また、効果的資料、スライド制作については、一部成果物に対する客観的評価を行なった。

<p>[PLOT STEP]</p> <p>1. 「条件把握」</p> <p>①自分のプレゼンのSWTH（環境制御）全てを理解している ②自分のプレゼンのSWTH（環境制御）のほとんどを理解している ③自分のプレゼンのSWTH（環境制御）の半分を理解している ④自分のプレゼンのSWTH（環境制御）をあまり理解していない ⑤自分のプレゼンのSWTH（環境制御）を全く理解していない</p> <p>2. 「相手の特性確認」</p> <p>①聴衆の分析ができ、興味を持たせる内容を含んでいる ②聴衆の分析がほとんどでき、興味度を高める意図がある ③聴衆の分析が半分程度でき、興味度を高める意図がある ④聴衆の分析があまりできておらず、興味度を高める意図がほとんどない ⑤聴衆の分析が全くできておらず、興味度を高める意図がない</p> <p>3. 「設計」</p> <p>①アイデアの関連情報を調べることができている ②スライドホルダーの使い分けができている ③アイデアを他人に説明することができる ④アイデアを記事や図などで発表できている ⑤1つ以上アイデアを考案できている</p> <p>[PREPARATION STEP]</p> <p>4. 「メッセージ決め」</p> <p>①メッセージの優先順位が決められている ②プレゼンのメッセージの候補がいくつか思いついている ③メッセージの優先順位が明らかになっている ④聴衆の資料をキーワードごとにまとめている ⑤集めた資料を根拠として使えるように分類できている</p> <p>5. 「ストーリーライン」</p> <p>①聴衆に合わせたストーリーラインが作成できている ②聴衆にストーリーラインが作成できている ③PREPに沿ったストーリーラインが作成できている ④ストーリーラインができていない ⑤PREPの内容を理解している</p>	<p>6. 「中身」</p> <p>①聴衆の相手に対応した中身が作成できている ②1つのパートに対応した中身が作成できている ③イントロからエンディングまで作成できている ④イントロから中身まで作成できている ⑤イントロまで作成できている</p> <p>7. 「効果的資料」</p> <p>①少ない文字数で一枚のスライドにまとめられる ②一枚のスライドに落とすことができる ③一枚の絵で説明できるようにまとめられる ④情報をチャートや図に変えることができる ⑤重要な情報を書き出すことができる</p> <p>8. 「スライド制作」</p> <p>①違和感なくアニメーションを使うことができる ②フォント・文字の大きさ・画像などに工夫ができる ③資料の色を統一できる ④見やすい配置にできる ⑤スライドを作成できる</p> <p>[PERFORMANCE STEP]</p> <p>9. 「リハーサル」</p> <p>①自然な立ち振る舞いで発表ができる ②聴衆に気を配ることのできる発表ができる ③メモを確認する回数や時間が少なくなる ④パワポのメモ機能を使っている ⑤プレゼンのメモを用意できている</p> <p>10. 「発表前確認」</p> <p>①予想した質問の関連知識を熟知している ②予想した質問に対する返答ができる ③聴衆に対する質問の予想ができる ④発表する順番の設備に合わせて準備できている ⑤画面比率を合わせることができる</p>
---	--

図6 学習進捗評価項目と5段階別の評価基準

3.5.2 相互評価シートについて

また、第4回WSでは参加者の相互評価を実施した。図7に実際の第4回ワークショップで使用した評価シートを示す。これはプレゼンテーションについて5段階評価とコメントを行う機能を備えている。評価項目として、3.5.1で述べた学習進捗評価指標におけるメッセージ、効果的資料、リハーサルに当たる内容の評価する。

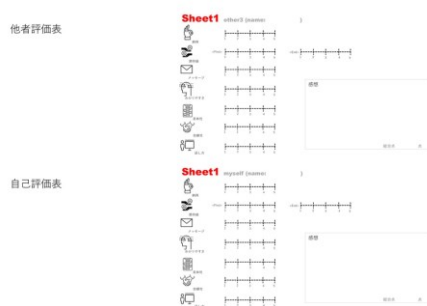


図7 ワークショップ4回目で使用した評価シート

4. ワークショップの実施

4.1 受講者と日程について

ワークショップの受講者は、静岡大学情報学部2年生もしくは3年生で、いずれも静岡大学ビジネスコンテストの出場者もしくは、それと同様のプレゼンテーション能力・関心を持つと思われる情報学部のビジネス計画専門セミナーの受講者である。また、受講するにあたり過去にプレゼンテーションで使用したパワーポイント資料を持っており、その資料のレベルアップを図りたいという意図がある。

日程は平成29年11月28日から平成29年12月21日までの期間に行った。一週間に一度の90分間のワークショップを4回実施した。

4.2 フィードバックの実施

4.2.1 1回目のフィードバック

フィードバック1回目では、第1回から第3回目でのワークショップで作成された成果物を元に講師が受講生の学習状況をフィードバックする。3.5 学習進捗評価指標を用いた採点は場には示していないが、改善点を中心としたコメントをフィードバックした。

4.2.2 2回目のフィードバック

第2回フィードバックでは、採点結果をレーダーチャートで表し、学習進捗度に対するコメントと参加者の個性に合わせたコメントをフィードバックする。

例として学習進捗度の低いものに対しては下記のようにコメントした、

リハーサルにおける学習が特に足りていませんでした。プレゼンテーションのメモとしてパワポのメモ機能までは使えていましたが、メモの確認回数を少なく自然な立ち振る舞いで発表をする段階まで到達できていませんでした。リハーサル練習を重ねることが弱点克服の1つの手段となるので実践してみてください。

また、学習進捗度の高いものに対しては下記のようにコメントした、

スライド制作・効果的資料の学習はしっかりと身につけていました。コンテンツを利用し少ない文字数の簡潔なスライドが多く、文字や色の統一ができており、アニメーションによる聴衆へのインパクトのあるスライド制作ができていました。

以上を学習進捗度に対するコメントとしてフィードバックを行なった。

<学習進捗評価>
WS全体を通して行った内容に対してどのくらい学習できているかどうかの評価です。

必要以上の文字を削減し、統一感のある資料となり、「相互評価の「わかりやすさ」[メッセージ]」の項目にも現れていました。コンテンツの配置や色の配色を決めるスキル、わかりやすく話を展開するスキルが特に身につけていました。

リハーサルにおける学習が特に足りていませんでした。プレゼンテーションのメモとしてパワポのメモ機能までは使えていましたが、メモの確認回数を少なく自然な立ち振る舞いで発表をする段階まで到達できていませんでした。リハーサル練習を重ねることが弱点克服の1つの手段となるので実践してみてください。

スライド制作・効果的資料の学習はしっかりと身につけていました。コンテンツを利用し少ない文字数の簡潔なスライドが多く、文字や色の統一ができており、アニメーションによる聴衆へのインパクトのあるスライド制作ができていました。

今回の聴衆: 自分の手に届く範囲で現実味の帯びている比較的新しい情報サービスや技術に関連した提案を聞きたい、という世界観を持っている聴衆でした。

聴衆分析から、顧客という立場で聞いてくれているのでリハーサルまたはその段階から聴衆に質問を投げかけ、より聴衆に合わせたプレゼンとなるでしょう。また、発表中に反応をすることが多い聴衆のためプレゼンの中で聴衆に意見させることや聴衆が選択する場面を作るなどあなたの話の組み立てるスキルがあれば可能でしょう。プレゼンの内容は、理にかなった提案内容でしたが、一般論から抜け切れていませんでした。提案内容やその根拠に対するあなたの想いや考えこそ聴衆が聞きがっていることです。理論的な話の構成の中にフックポイントとしてあなたの感情的な部分を入れることができるようになることと次の段階に進めると思います。聴衆分析の本格化（興味のあること以外に立場や視点などの分析、相手への伝達能力の向上（スライドや話のわかりやすさではなく話し方や言語、ボディラングージなど）を学ぶことが次なる成長へ続くと思います。頑張ってください。

図8 フィードバック 2 回目例

4.3 相互評価の実施

相互評価の結果をレーダーチャートで表し、コメントを一覧にまとめたものを結果として2回目のフィードバックのタイミングでフィードバックとともに参加者に配布した。

5. 実施結果分析

5.1 指標を設定した10項目の評価

5.1.1 講師からの評価

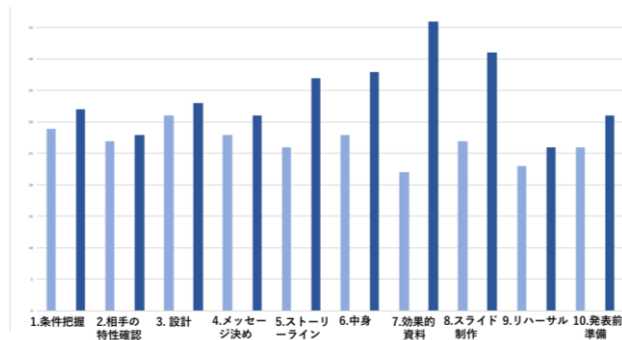


図9 受講者の採点結果

受講者の受講前の発表資料と受講後の最終成果物による評価結果の評価項目別の平均値を図9に示す。薄い柱グラフが受講前で濃い色の柱グラフが受講後となっている。全10項目の中で効果的資料の項目の成長率が一番高く、リハーサルの項目の成長率が最も低かつ受講後の点数が一番低いという結果となった。また、第1・3回目のワークショップの学習内容よりも第2回目ワークショップの学習内容の数値が全体的に高かった。

5.1.2 自己評価

本ワークショップ参加者からの自身のスキルアップ状況を調査した結果をまとめたものを図10に示した。3.5の指標にはないが、時間配分と発表時の表情についての項目を追加して調査した。青色の柱グラフが「スキルアップを非常に実感した」、赤色の柱グラフが「スキルアップをやや実感した」、黄色の棒グラフが「スキルアップを全く感じなかった」という3つの選択肢を設けて調査した。全体的にスキルアップを感じた参加者が多く、「5W1H」、「ストーリーライン」、「コンテンツ利用」、「アニメーション活用」、「台本作作」、「話し方」、「表情」の7項目は参加者全員がスキルアップを感じた結果となった。ワークショップ1回目の内容より2・3回目の内容の方がスキルアップを感じている結果となった。

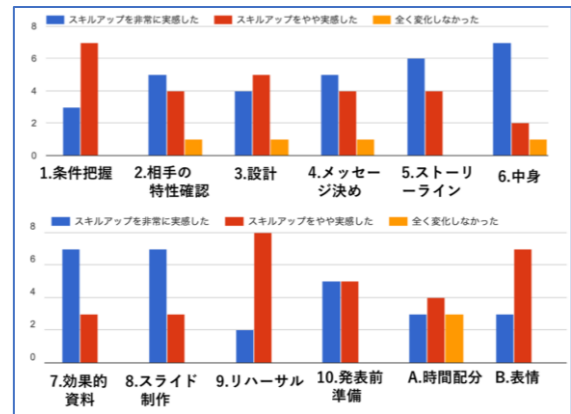


図10 アンケート結果に基づくスキルアップの状況

5.1.3 他者評価

4.3で実施した相互評価の中で指標に準ずる4項目の評価結果を図11に示した。リハーサルの項目は他の項目と比べ低い評価となったが、その他の項目同士の差はあまり見られないという評価結果となった。

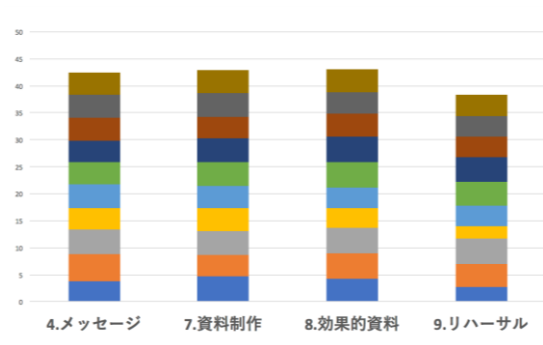


図11 他者評価結果

5.1.4 客観評価

全10項目のスキルの中で効果的資料制作とスライド制作の観点で客観的評価を行なった(図12)。文字数は約35%減少しており効果的資料の効果とみなされる。スライド制作観点では約44%増加しておりスライド制作の効果とみなされる。

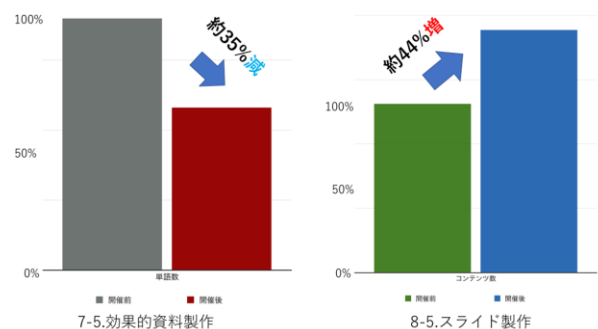


図12 個別のスキルでの効果

5.2 相互評価・フィードバック効果

5.2.1 フィードバックの効果

ワークショップ参加者からの講師からのフィードバックについて調査した結果をまとめたものを表1に示した。参加者からのコメントより、フィードバックによって参加者それぞれの強化すべきポイントや改善点に対して意識を高める効果があったと思われる。

表1 アンケートによる講師からのフィードバックへの評価一覧

参加者	コメント
A	最終回のスライドを作成するにあたり役立った。プレゼンに関するフィードバックも意識改善の助けになった。
B	スライドの文字数をもっと減らすことを意識できるようになった
C	リハーサルの撮影などを通じて自分を客観視できた
D	客観的な評価が意外と自分で気づけていないところに
E	改善点を次回発表までにできるだけ消化し、改善できるように心がけた。具体例があったのでイメージがしやすかった。評価ポイントで挙げてもらった部分は、今後発表（WS以外）する場面でも利用しようと感じた。
F	話の組み立て方を改善するの役立った
G	フィードバックに関しては、これまでそうした機会を得ることがなかったので、新鮮なためになりました。
H	自分の良いところが教えてもらったので自信になった
I	主観的ではなく客観的な目で見てもらったので改善しやすかった
J	聴衆分析が甘かったことに気づけた。

また、講師から役に立つフィードバックが含まれていたかという質問に対して参加者の回答を集計したものを図13に示した。「強くそう思う」と答えた参加者が50%、「そう思う」と答えた参加者が40%、「どちらとも言えない」と答えた参加者が10%という結果になり、ほとんどの参加者に対してフィードバックが効果的であると受け入れられたことになる。

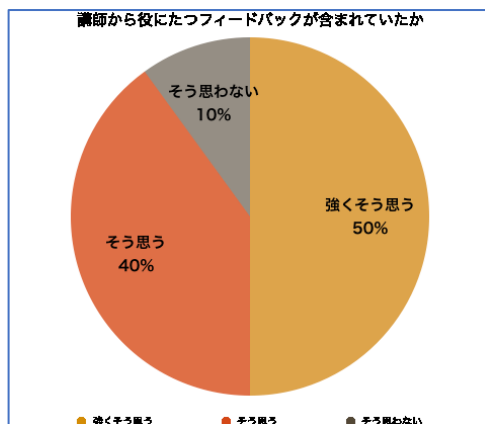


図13 アンケートによる講師のフィードバックへの評価

5.2.2 相互評価の効果

参加者からの相互評価を行なったことに対する評価を一覧にしたものを表2に示した。相互評価を行なったことによって聴衆の意見や受け取り方を知ることができたという評価が半数以上であった。相互評価を行うことによって他者から見たプレゼンテーションと自身の感覚でのプレゼンテーションとの差異を認識する効果が確認できた。

表2 相互評価実施に対する評価一覧

参加者	コメント
A	聞いている人がどのように受け止めていたのかわかった。また、それを知ることで次から気をつけることや残すべき点があったこと。
B	自分の中の感覚と実際他人からの評価とのギャップを理解することができた点
C	他の人からの評価がわかること
D	意外と自分が思っていたこととズレていることがわかることに役立った。
E	客観的な視点
F	同じ視線の人からの意見を聞いてよかったです。
G	思っていたよりも高評価だったんだな〜って気づけました。
H	他の人から見た自分の強み弱みがわかったこと
I	同じような人からの評価がわかった点
J	自分のプレゼンの良いところ悪いところをどのように受け止められているのかわかったこと。

5.2.3 受講生のタイプ別効果

今回ワークショップを受講した学生を情熱派と理論派、その2つのタイプの間際に当たる中間派の3つのタイプに分類することができた。

(1)情熱派の学生への効果

情熱派の学生の特徴として、自身の体験や持論を軸にしてプレゼンテーションの中で自身が主張したい内容の説明が多く、主張したい内容への他の受講者からの提案内容を取り入れることがあまり見られなかった。また、10名中4名情熱派に当てはまり、女子3名、男子1名という割合だった。相手の立場や考えに適合させることが不十分である傾向だとわかった。そして、話の展開の仕方や内容などを客観的な視点を意識するようにフィードバックをすることで聴衆に適したストーリーラインの作成や聴衆分析が行えるようになる効果があった。

(2)理論派の学生への効果

理論派の学生の特徴として、話の流れを論理的に展開することができるが、関連データ・情報を多く掲載しているがそれらを自身の主張の根拠として有効的に活用できておらず最も主張したい内容が明確ではない、提案内容が一般論であり具体性に乏しい傾向があった。また、10名中3名理論派に当てはまり、女子2名、男子1名という割合だった。そこで、プレゼンテーションのメッセージの明確化や具体性を持たせるために自身の考えを主張するスキルの強化をフィードバックすることで、自身で作成したコンテンツによる主張の改善効果が見られた。

(3)中間派の学生への効果

中間派の学生の特徴として、自身の考えによる主張と一般論やデータを用いた論理的思考のバランスができてはいるが、効果的に相手に伝えるスキルが不十分であるという傾向であるとわかった。また、10名中3名中間派に当てはまり、女子1名、男子2名という割合だった。自身でコンテンツを作成できるウェブサイトや検索手段を指導したことによってスライドに改善が見られた。評価指標における効果的資料、スライド制作項目の学習効果が確認できた。

5.3 PREP 法の適用に関する評価

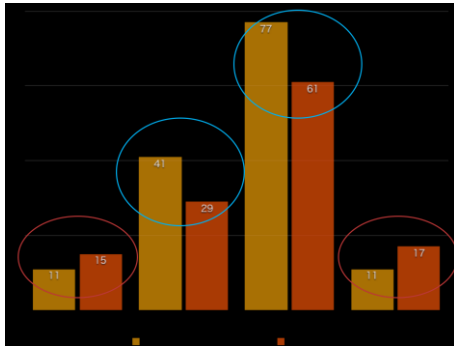


図 14 PREP 法の各段階におけるスライドページ数の変化

各 PREP 法段階に属すると見られるスライドページ枚数の変化を表したものを図 14 に示した。主張・まとめ段階のスライド枚数が増加し、理由・提案段階のスライド枚数が減少した効果が見られた。

5.4 ワークショップの改善点に関する評価

本ワークショップの参加者からのワークショップの改善すべき点を調査しまとめたものが表 3 である。ワークショップの開催期間については、4 週間の期間で開催したがもう少し長い期間で行って欲しいという回答が半分であった。また、内容については、ワークショップの各段階で具体例の提示、WS 全体を通してどのようなプレゼンを作るのかという具体例が欲しかったという評価が見られた。開催期間の長期化と成果物の具体例など求める品質の具体化が改善点としてあげられた。

表 3 ワークショップの改善点への回答一覧

参加者	コメント
A	プレゼン面、内容面、スライド構成面など、それぞれの点についてのフィードバックがあればなお改良しやすかったと感じた。
B	スパンが短いところ
C	もう少し回数を増やせるといいと思う
D	もう少し長期的にやってほしかった。立案段階からのワークにつなげたかった。
E	今後の指針として応用編をして欲しかった。するだけで自分の中でも振り返り不足で終わってしまった印象。
F	ストーリーを組み立てるのに、もう少しこのWSでどのようなプレゼンを作るかの具体例が欲しかった。
G	短期間で〜という反省点を挙げられていましたが、やむを得ないと思いますし、あれ以上長いと疲れます。
H	ほかの人の良いスライドの例がもっとほしかった
I	資料製作にかかる時間が短かった点
J	期間をもっと長ければよかったと思う。

5.5 ワークショップ受講による効果の考察

5.1.1 と 5.1.2 の結果から受講者が自身のスキルアップを一番感じた項目と、第 2 回ワークショップの学習内容に対する講師からの学習進捗度評価と一致していた。これは、スライド制作において即座に実践し効果のある学習内容であったからであると考えられる。しかし、他の項目では成長を実感したものと講師の評価が不一致しているものが多かった。これらは、即座に成長を感じるものではなく数回の学習機会を通して身につく内容であったからだと思われる。

次にフィードバックを導入したことによる効果として、学習進捗評価指標を用いることでプレゼンテーションの基礎的な部分において良し悪しを数値として理解することができた。また、参加者には、強化すべきポイントや改善点に対して意識を高める効果があった。

相互評価において他者への評価は、リハーサル以外の項目以外は同様な点数となり顕著な差が見られなかった。これは受講者同士が知り合いであり低い点数をつけることが難しかったのではないかとと思われる。しかし、他者からのコメントから客観的なプレゼンテーションと自分の感覚でのプレゼンテーションとの差異を確認することができる効果があった。

情熱派、理論派、中間派の 3 つの学生タイプとワークショップとの関係について以下の二点が注目される。

一つ目は、学生タイプ別による改善点の違いが見られた。情熱派の学生には第 1 回・第 3 回ワークショップの内容、中間派と理論派の学生には第 2 回ワークショップの内容を中心としたフィードバックを行なったことで改善効果がみられた可能性があると考えられる。

二つ目は、学生タイプ別によるワークショップの学習効果の差異がみられた。情熱派の学生には、相互評価による自己分析から客観的な視点を持つことができ、情熱派タイプの弱みの改善に繋がったと考えられる。

理論派の学生には、聴衆分析による相手の立場に合わせてプレゼンテーションをすることができ、理論派の強みの強化につながったと考えられる。

中間派の学生には、効果的な資料にするために文字数を削減しコンテンツを増やすことができ、視覚的効果の活用方法を身につけることができたと考えられる。

このように、今回のワークショップでは、全体としての効果と学生タイプ別での効果を確認することができた。その反面、内容の変更によりワークショップ期間で内容を変更し完成に間に合わなかった場合において、文字数の増加とコンテンツの減少というケースも見られた

6. 結論

6.1 結論

本研究では、プレゼンテーションスキルの向上を目的として、従来からの学習テキストに基づいてワークショップを企画した。さらに、従来の研究の課題であった学習モチベーションを上げるために新たに学習進捗評価指標による学習進捗度の確認と、フィードバックを導入した。

これらを用いて静岡大学情報学部の学生 10 名に対して 4 週間にわたりワークショップを開催し、開催前後でのプレゼンテーションの改良効果を分析した。

ワークショップを受講したことによって、全 10 項目中スライド制作に関するスキルが指標での測定結果と受講者の実感からスキルアップ効果が見られた。成果としては、

フィードバックはモチベーションの向上、相互評価は他者からのコメントによる客観的事実の認識に効果があった可能性が示された。

受講者を情熱派、理論派、中間派に分類でき、それぞれ弱みの改善、強みの強化、視覚的効果の活用法を身につける効果があったことを確認できた。

しかし、ワークショップ期間でのプレゼンテーションの内容を変更し、間に合わなかった場合において本ワークショップで期待する効果とは逆の効果が見られるケースも確認できた。

6.2 今後の課題

今回のワークショップでは、4週間という短い期間でしか時間を確保することができず、参加者が成果物の品質を向上させることよりもとにかく完成を目的とした面が強かった。また、コンテンツの活用方法におけるスキルへの学生の興味が高く、他のスキルとの学習進捗度に差異が出た。ワークショップ開催の期間を長期化または分割化することで成果物の品質向上に適した期間での実施が求められる。

謝辞

ワークショップに参加していただいた2017年度静岡大学情報学部2・3年生の皆様に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- [1] 情報処理学会 第139回CE研究発表会「プレゼンテーション制作法に関する学生向け学習方式」金ヨソノ（静岡大学大学院）、湯浦克彦（静岡大学）
- [2] Antony Jay (1974)「Effective Presentation」British Institute of Management
- [3] 菅野誠二（2018）「外資系コンサルのプレゼンテーション術」東洋経済新報社
- [4] 一般社団法人日本経済団体連合会ホームページ HP Policy（提言・報告書）ページ 2017年11月27日 労働 2017年度 新卒採用に関するアンケート調査結果 PDF <<http://www.keidanren.or.jp/policy/2017/096.pdf>> 2018年1月27日アクセス
- [5] バーバラ・ミント（1999）「考える技術・書く技術」ダイヤモンド社
- [6] 中村かすみ・中嶋秀隆・マツシルバーマン（2005）「できる・使えるプレゼン術」日本能率協会マネジメントセンター
- [7] ジーン・ゼラズニー（2004）「マッキンゼー流プレゼンテーションの技術」東洋経済新報社
- [8] Kevin Carroll・Bob Elliott（2015）「ビジネスは30秒で話せ！」すばる舎